

精密総合健診（人間ドック）

動 向

近年は、健康志向が高まり人間ドックの受診者は年々増加傾向にある。人間ドックは、日本独自の健康診断システムで、がんの早期発見と生活習慣病の予防と早期発見を目的としている。当協会では、日本人間ドック学会が行っている専門性の高いサービスを、第三者の目から客観的に評価する「人間ドック健診施設機能評価」を受審し、その認定を取得している。

また、今年度より3代目となるマルチディテクタブルCTを導入した。この装置は、X線検出器が16列になり、それに伴い撮影時間の短縮、受診者への被ばく線量の低減に加え、より詳細な画像の撮影ができるようになった。このCTを使用して、オプション検査の肺がん検診や内臓脂肪測定を実施している。

受診者の方が、安心かつ快適に受診していただけるよう、より質の高い人間ドックを目標に、継続的な改善活動に努めている。

方法と結果

年度別受診状況では、平成23年度は男女とも微減した（表1）。

受診者前歴（表2）をみると引き続き男女とも継続受診が多い。最近数年のデータからは、総受診者数の増減は新規受診者の獲得の大小によるところが大きいと考えられる。

総合判定区分内訳（表3）をみると、「異常なし」、「心配なし」を合わせても男性0.7%、女性1.9%とわずかである。「要観察」は男性7.5%、女性18.0%と例年と変化は見られない。治療中も含めさらに検査や受診が必要な再検以上の区分の受診者は男性67.2%、女性55.0%であった。

がんの新規発見を臓器別にみると（表4）、発見数が最も多かったのは前立腺がんおよび胃がんの各7名で、次いで乳がん6名、ヘリカルCTによる肺がん2名を含め、全体としては新規のがん発見は受診者の0.26%と前年と同程度だった。PSAによる前立腺がん検診は男性受診者6,153名中1,793名（29.1%）が受診し、うち7名（0.39%）が前立腺がんと診断された（表5）。PSA検査の実施率は平成20年度をピークでここ数年横ばい状態である。PSAによる前立腺がんスクリーニングではその絶対値だけでなくその変化率（Velocity）も重要であるといわれており、50歳以降の継続検査が大切だと考えられる。実施率アップが望まれる。臓器別のがん発見率を全国平均と比較すると前立腺がんが高率で、自施設

設での再・精検体制の充実度に規定されていると考えられる。一方、大腸がんの発見率が少ないことが明らかにみられる。PSA高値に対するフォローが比較的徹底できているのに対し、当施設で大腸精検を実施できず要精検者全例に他機関受診を勧めている状況の中で情報を得にくいのが原因と考えられ、健診後の追跡調査を徹底するシステム作りが必須と思われる。

主な有所見率（表6）、検査データ平均値（表10）において過去データとの比較では、眼圧平均値の低下傾向は続き有所見率も低い状態が維持されている。血液学的検査では、白血球数は喫煙率が高い壮・中年男性にやや多く、貧血検査は男性で加齢とともに低下するが、女性では50歳代で反転増加する。腎機能に関しては平成21年度よりeGFR（推算糸球体濾過量）による評価を導入したことで、早期に慢性腎臓病（CKD）をスクリーニングされるようになった。加齢変化が明らかでありCKD診療ガイド2012（日本腎臓学会）に沿って、2013年度より判定基準を変更する予定である。脂質異常は男性47.1%、女性34.0%と非常に高い。女性は50歳代以降LDLコレステロールが増加しホルモン変化の関与が大きいと思われる。男性は40・50歳代の中性脂肪のほか肥満度やγ-GTPも高く、同年代男性では3人に1人に脂肪肝がみられている。アルコールの影響のみならず多忙で不規則な生活環境が内臓脂肪型肥満および脂肪肝を増やすと考えられ、最近では生活環境病とも言われる。しかし、ここ数年は脂質異常、糖代謝異常や尿酸高値の出現頻度が僅かに低下傾向から横ばい状態となっている。

胸部X線・CT異常（表6、7）は例年とほぼ同じ傾向であった。胸部X線検査は数名の読影医が携わっているため、総括医による最終チェックを行い所見のとり方にばらつきが出ないように調整している。胃部X線所見（表6）は特に変化なく、安静時心電図所見の内訳（表8）も例年と同様である。腹部超音波所見（表9）では、平成22年度には読影医師変更によると考えられる有所見率増加がみられたが、平成23年度は前年度同様であった。

「特定健診・特定保健指導」は平成25年度から第2期に入る。人間ドックの中で当日階層化し面接するシステムは定着した。5年間の指導効果をまとめ、今後の効率的・効果的な保健指導にむけて活用したい。

関係の集計表は127頁に掲載